

今ひとつの煨焼

小岡明裕

En effet, la première venue ressemble

à la spirale précédente :

Malarme

たしかに、そのとき、階段のうえから覗きみると、そこは水びたしであった。

手摺のない螺旋階段、白い肘掛椅子、むきだしの高い壁、それらが雑然と灰暗い水の影に漬っている。目を閉じてそこを部屋とよぶには、かなりいびつで、そのうえいたずらに細長い楕円形のような匿名の空間。海はその外側にある。

そこと海とが溶けあっている浅瀬、そのあわいは沙漠とよばれ、豊かな起伏に乾いた砂の傾斜は部屋と海とをつなぎ、徐々に海のほうに向かつてせりあがっている。

それゆえ、階段のうえから覗いたそこ、すなわち部屋は、顔縁におさまった銅版画のように偶然を内包している、としかいいようがない。

次々と、幾羽もの黒い水鳥が水面をかすめて逃れ去っていった。

さむざむとした陽はとうに落ちていく。

しかももはや何ひとつ、巻き貝も囁きも、またやさしく入り組んだ夢の舞台も、何もない。

あるいはこうだ。——叫びと夢の二点接近法のなかで雲母の海がそのまま遠くあちらのほうへはがれてゆくとき、そこいらは一面苦い水泥のひりつく荒磯のひろがりむきだしになる。抗いながらも足はするすると緑と茶色の膠質にとられ、そんなとき空はきまって底ぬけに明るい。

たしかにそこは水びたしであった。目を閉じれば小さな波がきれぎれに盛りあがり、風にくるまれては舞いあがって次々と沙漠のほうへ運び去られた。

スパイロス！　ここをよぎるもの、そこに戻り、ここに至るもの！

——吹く風とともに階段ははげしく揺れた。

正直いって、わたしはその時に遅れがちだった。

覚束なげな振り時計のように、元の場所に戻る仕草、つまり階段に立つことに少しずつ遅れ気味であった。といって、海に背を向けむやみに森に踏み迷っているのではない。ここを通りぬければ再びそこにでられるというわけではなかった。

一羽の飛翔する鳥のかたちをきめこんでその時をうかがってはいたものの、帰路はつねに修正の外にあって、鷗の通路、たとえば尖塔に突きあたる飛行の痕跡に羽を突きだすこともなく、ひまどっているのである。

その間も、いっさんにかすめ過ぎてゆく水鳥の黒い羽がくれないに燃えあがり、水びたしのシメールと迷妄の白い日々とは振り子にも似てめまぐるしく入れかわる。

そのためかどうか、そのひろがりの緑の緑さえ、わたしを飲みこむことができないのだ。はたして階段のうえからみれば極端に歪んだ楕円形のひろがり。その外には海がある。

ここからみると水面全体が壁であり、階段である。

そのひろがりはおそらくいつものようにいまだにそのなかでひとつのひろがりおよびうるほどのものになつていないらしい——少なくとも外からではなく内側からあふれたものにちがいない。

たしかにそこは、水びたしであった。

大昔にわたしはそこに船火事をみた記憶がある。波のうえに這いひろがる低い炎に際立って、半ば水に没した火の柱が偶然のように美しかった。

気がつけばすべての物が最初の秩序に復していた。視界はひりつく泥の岩場で塗り潰されている。思

えばあの火の柱は外海を照らすことはなかったのか。
海をさして今も鳥は飛び去ってゆく。

わたしは遅れがちのままだ。強いられたこの果てしない旅に。船火事をさながらに、金波銀波の容赦ない散乱のあとか、あるいはそれに先立つてのことか、いわば、触れえないもえあがりの予感が眼底に貼りついたまま、階段のうえから覗きみると、たしかに部屋は水びたしである。
さしあたって、満ち潮のいつくしみと引き潮の不安のなかで、傾斜は偶然を孕んで徐々に海のほうへ。

Je 8 mar, 1983.

黎明

洪水の過ぎ去った朝まだき、舟は鉛の卵を載せたまま、満潮の果樹園から碇をあげる。
下草の陰のかぐろいはてりの波が入江のなかを浸してゆく忘却の塩の時間。背後では、土の板に根をおろした気怠い風の只中に記憶の碇を投げ入れる物音が夢の帆布を引き裂いているが、庭師が難破を度忘れするように、掌のなかのマストが波頭に刻まれたシレーヌの緑の歌を憶い出せば、錆びついた悲鳴は野火となって燃えあがり、空の高みへ消えてゆく。振り返る版図の果てには何も無い。

(舟はいつものように、欠伸する大鎌の曲線に沿って航海する)

ただ、いつもとちがうのは、刈り取られた秋の標の風景。魚という魚が乾涸びて、夜の果ての白い腹をみせ、そここに思いがけない幻を撒き散らしている。

それでも航跡が刃紋のうえに蹴立ててゆく白波は、果樹園の無数の畝の盛りあがりのうえに怠惰な真白のしぶきとなって散っているが、散りしぶく白さは、縄を張りつめた夢魔の時の浪費にほかならない。

終末の日に熟れるはずの葡萄の蔓が締めつけている羅針盤の端から、蜘蛛の巣をすかした鱗雲の紙魚だらけの海図のうえにまで、壮大に架かった虹の橋。銀色の船体が危い約束の七色の曲率を辿ってゆけば、ゆき会うのは億年の孤独のなかで双のまぶたを切除した水夫ばかり。

——ころおい、暗い船底では、鉛の卵が世界のように覆る。

むろん日を経てこの海をわたるものが、忘却の淵にせりあがつてくる水夫らの夥しい死骸の旅の歲月を見ないはずはない。漂う体が今けもののように熱いのは、重い疲労の船底で卵が孵化しはじめたからにちがいない、このまま塩たれた朝風が奮い沙漠に寝乱れた風紋の装のなかで行き暮れるころには、世の終わりのための謎めいた鉛の文字がいくつか、洪水の底に燠のように燃えた土とともにこねあげられるであろう。

暗い大地。眠る海国。

波間に漂う舟の下半身は、徐々に蛇の尾の色に照り映え、そのまま砂時計の壺の底にとぐろを巻いて息わしい水腫のように鎌首をもたげ、肉の迷路に聞き耳を立てる。

古い記憶をたぐりながら輻轆を回し、もうひとつ砂時計の壺を内側からこねあげ、ふいこの窯に火を入れて風下に呪文をはなつと、冒険の接木が逆立ち、地平にわだかまる積乱雲のくぼみには、あわただしく反転する魚が光る。しかも、それもこれも日の出を待っての極のなかのいつときの苦役にすぎぬ。鉛が融け尽きたためか、下半身がすっかり蛇になりきったためか、舟は吃水が徐々に浅くなり、気がつくともう井戸の傍に船先を突っ込んでいた。

海は全体が苔むした果樹の根元の芝土にしみこんで波打っている。

船先に垂れ下がった鉛の文字は解きほぐされることもないまま、このときようやく、吐き気にも似た海鳴りが果樹園の深い井戸の底から聞こえはじめる。